

人生におけるしごと



加藤昌子

北海道大学大学院理学研究院
[060-0810] 札幌市北区北10条西8丁目
教授、理学博士。
専門は錯体化学。
mkato@sci.hokudai.ac.jp
wwwchem.sci.hokudai.ac.jp/~cc/

研究者でありたいと思う者にとって「仕事」としての研究は自分の興味のあることであり、やりがいがある、あるいはやるべきこととと思っていることである。もちろん、仕事としての研究は給料をもらっている以上、義務や責任をとることは言うまでもないが、研究者自身の裁量で活動することができるし、すべきことである。どのくらいするのか、できるのかということが問題になるのであろう。ちなみに大学で勤務していれば、研究以外に、授業やそのほか教育にかかわる「仕事」、組織の運営上の「仕事」などがあり、これらにもやりがいはたくさんあるが、年をとればだんだんその比重が多くなり、いかに仕事をやりくりするか（いわゆるエフォート管理）が重要になってくる。しかし、本欄の若い読者の関心は、「仕事」としての研究と、家庭とか子育てとかのプライベート「私事」とをどう両立していくかということなのだと思うので、ここでは研究と子育てに限定して、もうすっかり忘れかけていた昔のことを思い返してみた。

子育ては最大の仕事であり、人生の喜びや充実感が得られるものである。子供ができると女性はほかのことはあまり見えなくなってしまうくらい興味深いものであり、体自体がそのように作られている。しかし、いったん子供が生まれると、それはもう毎日が自分の思うようにいかない。不測の事態はいつでも起こると覚悟して、予定された仕事は早め早めにやっておくことを心掛けないといけない（わかっているにもかかわらず実際にはそう簡単ではないので、絶体絶命のピンチと感じたこともあったかな）。子育てまっただ中の人はいつまで続くこの苦労と思うときもあるかもしれないが、断言できるのは、子育ての期間は人生の中では一時期であることである（筆者は一人しか育てていないのであまり大きなことは言えないが）。その期間、研究に割ける時間

は制限されるが、制限されるゆえに集中力が出る（出さざるを得ない）とも言える。人は締切りや制限があるほうが仕事は進むということは誰しも身に覚えがあるのでは、と思う。大切なのは、やめないということ。一時期、振り分けられる力が50%になったとしても続けることだと思う。そのためには、利用できるものは、保育施設はもちろん、親や親戚、近所の人、なんでも有効活用である（ただし、信頼できるものに限る）。

今では多くの学協会の年会の折などに男女共同参画関連のセミナーやシンポジウムが開催されており、いろいろな人の研究と子育ての苦労や工夫の話聞く機会も増えた。筆者自身は錯体化学を専門としており、日本化学会、錯体化学会、光化学協会で男女共同参画企画に関与してきているが、この頃心強く思うのは、若い人たちの考えはフレキシブルで、子育てに対して男女のこだわりなどなく自然に受け入れていることだ（そういう人がこの種のセミナーに来ているとも言えるが）。課題は、仕事をする者にとって常に一緒に暮らせるとは限らないことだ。北大に勤務していると単身赴任者は多く見かける。ある程度年をとれば、筆者自身も含めて個人の勝手にいろいろな形態があってよいと思うが、子育ての初期の時期は二人協力できる体制にあることは幸せである。仕事をする上にもよりやりやすい環境であるはずだ。しかし、もしチャンスがあって一人で仕事と子育てやることを選ぶべきか迷ったら、子育てを理由にあきらめないでほしい。

今年の4月に一人娘が子供を産んだ。孫ができた。久しぶりに赤ん坊を見て、抱いて感動した。同時に、わが娘のたくましさも感じた。若い世代の人たちに大いに期待しつつ、頑張っている人たちを応援していきたい。そのためにも、筆者自身もまだまだ感じるこの頃である。